一宮市博物館　1988.3

博物館だより

No. 2

企画展「パレススタイルの美」

昭和63年3月5日(土)～4月3日(日)

1. 壺　岩倉市石仏西広畑遺跡出土 高さ31.5cm　京都大学文学部博物館蔵

今から約1,900年前(弥生時代後期)から古墳時代初頭にかけて、繊細な紋様が施され、丹(に)が塗られた紅く美しいパレススタイル土器がつくられました。

市内の多くの遺跡からもこうしたパレススタイルの土器が出土しており、一宮市を中心とする尾張平野に集中的に分布するこのパレススタイル土器の変遷をたどりながら、その用途、丹塗りの意味を探るとともに、その美しさ、華麗さ、繊細さを鑑賞する場として開催するものです。

名称の由来

パレススタイルとは、宮殿様式（宮廷様式）という意味で、名古屋市熱田区高蔵貝塚から出土した赤色彩色、櫛描紋をもつ壺にちなんでいます。昭和のはじめ、この土器を見た京都大学の教授、浜田耕作(青陵)の言「かの希臘(キリシア)クリート土器中、クノッソスの遺品が特に精大で『パレース式』と呼ばるる如く、弥生式土器中の『パレース式』と称したいくらいの優品である」により、エーゲ海クレタ島出土のパレススタイルの土器に優るとも劣らないくらい美しい、日本のパレススタイル土器だとして命名されたものです。この高蔵貝塚から出土した壺は、現在重要文化財に指定され、東京国立博物館に所蔵されています。

そして、今回出陳されました京都大学文学部所蔵の岩倉市石仏西広畑遺跡出土の壺形土器(写真1)が、昭和28年に刊行された平凡社の「世界美術全集第1巻」において、「濱田青陵博士が彌生式土器中の宮廷様式(パレス・スタイル)だと讃えたのは、こういう壺形土器であった」と小林行雄氏により改めて具体的に紹介され、パレススタイル土器の名称が確立されたのです。

パレススタイル土器の分布

弥生時代後期前半（山中期――宮市萩原町の尾張病院山中遺跡から出土した土器を編年の指標とする）になると、尾張地方を中心とした伊勢湾沿岸一帯に、赤色彩色と櫛描紋で飾った華麗な土器が出現します。特に尾張平野はその分布の中心で、市内でも山中遺跡をはじめとしてこの時期の遺跡からこうしたパレススタイルの土器が出土しています。そして弥生時代後期後半（欠山期）になってその伝統はわずかに壺形土器にのみ継承され、古墳時代初頭の元屋敷期になると、紋様の簡略化とともに分布地域が拡散します。

近畿地方、三河地方以東になるとその出土例は極端に減少し、特に東日本での出土例は尾張地方における元屋敷期併行期のものが主体となりました。

丹彩の意味

丹彩の原料は、ベニガラ（酸化第二鉄）で、こうした酸化鉄を含んだ泥（丹）を塗り付けて土器を焼成したものと考えられています。

丹彩が施される器種は、壺、高杯、器台、台付盌(まり)、鉢、ミニアチュア土器など多岐にわたっていますが、特にはなやかな装飾を持つものは広口の壺形土器であり、口縁部の形態の複雑さと相まって豪華さが強調されています。

壺形土器における変遷を見ると、山中期には、球形の胴部上半に直線紋、斜行線紋、波状紋を施し、紋様帯には彩色せず、胴下半部と大きく開いた口縁部内外面に丹彩されるのが通例です。欠山期には、下ぶくれの器形で、肥厚した口縁端面に太い凹線紋をめぐらすとともに棒状浮紋を貼付し、口縁内面に稜を有するなど複合口縁化が顕著となり、胴部を直線紋、山形紋で飾ります。元屋敷期になると、口縁は薄く作られその形態も単純化するとともに端面の装飾が退化する傾向があります。また胴部の紋様も簡素化され、丹彩で山形紋を描くだけのものまで現れます。

朝日遺跡で昭和55年度までに出土した丹彩土器156点の内、器種別の内訳は、壺67点、高杯59点、器台3点、蓋3点、鉢10点、ミニアチュア土器13点、手焙形土器1点であり、時期別には135点が山中期、欠山期10点、元屋敷期6点、時期不明5点と報告されています。また出土した遺構は、住居跡から1点、方形周溝墓32点、溝45点、土坑7点、包含層中より出土したもの71点となっています。

こうしたパレススタイル土器の用途は明確には判っていませんが、焼成前に丹彩を施していること、底部や胴部に穿孔したものがあること、ミニアチュア土器など非日常的用具にも認められることそして方形周溝墓や溝から出土したものが多いことなどから、日常用具としてではなく、葬送儀礼などの祭祀に使われたものと考えられています。

作られた時代

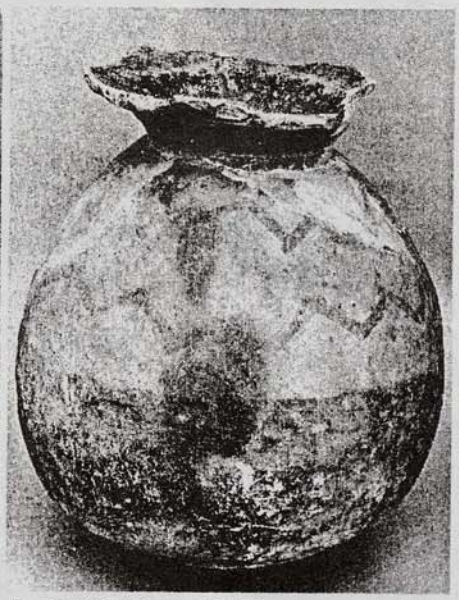
パレススタイル土器は、弥生時代後期山中期に、尾張平野を中心とする地域で盛んにつくられ、欠山期を経て、古墳時代初頭の元屋敷期においてより地域を広げて畿内、関東地方にまで分布します。このことは一体何を意味するのでしょうか。畿内では土器の装飾が簡略化されるこの時期にこうした華麗な土器が作られていたことは、尾張地方に畿内地方とは異なった文化の高揚があったことを示すものと思われます。パレススタイル土器は、尾張平野の古墳時代への胎動期の土器と言っていいでしょう。

2．台付壺　萩原町山中遺跡出土　高27.7cm

3．壺　大和町北川田遺跡出土　高27.4cm

8．蓋付壺　萩原町山中遺跡出土　高13.0cm

4．壺　千秋町海戸遺跡出土　高25.9cm



5．壺　富塚出土　高30.0cm

9．脚付長頸壺　萩原町山中遺跡出土
高34.4cm

6．壺　萩原町中島斎宮司出土　高32.4cm
中島文化会蔵

7．壺　丹陽町元屋敷遺跡出土　高26.5cm

10．長頸壺　萩原町出土　高20.3cm
名古屋市博物館蔵

11. 清洲町朝日遺跡出土パレススタイル土器群　左端長頸壺　高26.7cm
愛知県貝殻山貝塚資料館蔵

12. 壺　清洲町朝日遺跡出土　高24.9cm
愛知県貝殻山貝塚資料館蔵

13. 台付壺　岩倉市曽野遺跡出土　高25.0cm
桜井九二保氏蔵

14. 台付盌　岩倉市曽野遺跡出土
高17.5cm　京都大学文学部博物館蔵

15. 台付盌　名古屋市見晴台遺跡出土
高21.0cm　名古屋市見晴台考古資料館蔵

16. 長頸壺　美和町下郷合遺跡出土
高15.5cm　木全利男氏蔵

17. 壺　大口町仁所野遺跡出土
高29.5cm　大口町教育委員会蔵

18. 脚付壺　高25.5cm　蓋　高6.3cm
大口町仁所野遺跡出土
大口町教育委員会蔵

19. 壺　佐織町東西野遺跡出土
高30.8cm　佐織町教育委員会蔵

パレススタイル土器分布図

（『欠山式土器とその前後』より）

パレススタイル土器を出土した遺跡

■山中遺跡出土品（山中期）

山中遺跡は、一宮市萩原町冨田方の尾張病院構内にあり、昭和34、35年に愛知県教育委員会によって発掘調査が行われ、丹彩土器を含んだ良質の土器群が出土し、この出土土器群によって尾張平野における弥生時代後期前半の形式設定がなされています。名古屋市博物館蔵の長頸壺(写真10)も欠山期のものですが、この一帯から出土したものと考えられます。

丹彩の台付壺（写真２）は、胴部上半を平行直線紋と斜行線紋で飾り、胴下半部と台部、口縁端面、口縁部の内面に丹彩を施した美しいものです。また脚付長頸壺（写真９）は、古代ギリシアのクラテルを思わせる形で、口縁先端部に平行線紋、斜行線紋、竹管紋を組み合わせて配し、胴部の最も広い部分に断面三角形の３本の隆起線をめぐらし、その２本の隆起線にまたがって粘土を張り付けています。蓋付壺（写真８）は、蓋も身も全面篦(へら)で磨いた美しい仕上げのもので、ともに２個１組の小孔を２か所の対象的な位置にあけており、紐を通したものと思われます。ほかにもこの遺跡からは、丹彩の壺、高杯などが出土しています。

■北川田遺跡出土品（山中期）

北川田遺跡は、山中遺跡の東方1200㍍の一宮市大和町苅安賀にあり、昭和38年土取り作業中にパレススタイル土器を始め、弥生時代後期の土器が出土しました。この遺跡から出土した壺(写真３)は、胴上半部に直線紋、斜行線紋を施し胴下半部、口縁内面に丹彩を施したものです。北川田遺跡出土の土器群は、一宮市指定文化財となっています。

■蕪池(かぶらいけ)遺跡出土品（山中期）

蕪池遺跡は、一宮市千秋町町屋にあり、昭和39年に調査され、出土遺物から方形周溝墓ではないかといわれています。この遺跡出土の長頸壺は、頸部と胴部の境に凸帯を有し、扁平な胴部に丹彩を施しています。底部の中央に１個の孔が穿(うが)たれその特殊な用途を物語っています。

■中島出土品（欠山期）（写真６）

萩原町中島字斎宮司から出土したもので、胴部上半を直線紋と山形紋（丹彩）で飾りその下に丹彩による点列をめぐらし、底部にも丹彩を施しています。形態は下ぶくれであり、欠山期に通有のものです。

■元屋敷遺跡出土品（元屋敷期）

元屋敷遺跡は、一宮市丹陽町にあり、昭和36年発掘調査が行われ、前期弥生式土器である遠賀川式土器と、弥生時代終末期から古墳時代初頭の土師器が出土しました。この土師器を標識として古墳時代初頭の土器形式が設定されています。出土した丹彩の壺は、複合口縁のものと、直線的に立ち上がる口縁のもの（写真７）があります。

■海戸遺跡出土品（元屋敷期）（写真４）

この遺跡は、一宮市千秋町加茂にあり、昭和36年、土取り作業中に出土したもので、一宮市指定文化財となっています。

■富塚出土品（元屋敷期）（写真５）

昭和18年、大字富塚に残る富塚古墳（３段築成の円墳、径30㍍、高6.5㍍）付近から出土しました。

■朝日遺跡出土品（写真11、12）

朝日遺跡は、西春日井郡清洲町に所在する弥生時代全般にわたる時代の遺跡で、五条川左岸にのびる微高地上に位置し、昭和46年から継続して調査が行われています。現在までの調査の結果、朝日遺跡は弥生時代屈指の集落遺跡としての全貌を現しつつあるといっていいでしょう。

朝日遺跡から出土したパレススタイル土器は、前述のように昭和55年度までに156点を数え、質、量ともに一宮市域出土品と遜色のないものです。

■名古屋市南区見晴台遺跡出土品（写真15）

■岩倉市曽野遺跡出土品（写真13、14）

■丹羽郡大口町仁所野遺跡出土品（写真17、18）

■海部郡美和町下郷合遺跡出土品（写真16）

■海部郡佐織町東西野遺跡Ｂ地点出土品(写真19)

■海部郡八開村定納遺跡出土品　■萩原町苗代遺跡出土品　■北方町下渡遺跡出土品

参考文献

澄田正一・大参義一・岩野見司「新編一宮市史資料編２」1967，大参義一「弥生式土器から土師器へ―東海西部の場合―」1968，愛知県教育委員会「朝日遺跡」1982，愛知考古学談話会「欠山式土器とその前後」1986

謝　辞

本企画展開催にあたり次の方々にご協力をいただきました。記して感謝の意を表する次第です。

愛知県貝殻山貝塚資料館、愛知県埋蔵文化財調査センター、浅野清春、伊藤稔、大口町教育委員会、木全利男、京都大学文学部博物館、佐織町教育委員会、桜井九二保、中島文化会、名古屋市博物館、名古屋市見晴台考古資料館、服部元之、美和町歴史民俗資料館　（敬称略）

博物館活動のあゆみ

昨年11月13日(金) 開館以来1月末迄に13,000人強の来館者がありました。この間、開館記念特別展「一宮の名宝(Ⅰ)ー真清田神社と妙興寺ー」(11月13日～12月6日)、講演会「一宮の名宝について」(11月15日、京都国立博物館学芸課長金沢弘氏)、島文楽公演(11月23日)、第1回企画展「陶磁のこま犬」(12月19日～昭和63年1月31日)、講演会「陶磁のこま犬ー尾張の在銘資料を中心としてー」(1月10日、愛知県陶磁資料館学芸員仲野泰裕氏)・映画会と、企画展示・普及活動に取り組んできました。また2月13日から3月6日まで常設展示場に初公開の県指定文化財五大尊画像・市指定文化財愛染明王画像、桃の節句にちなんだひな人形・土人形を陳列しました。新年度は諸事業を一層充実させたいと思います。

利　用　案　内

開館時間

午前9:30～午後5:00
(入館は午後4:30まで)

常設観覧料

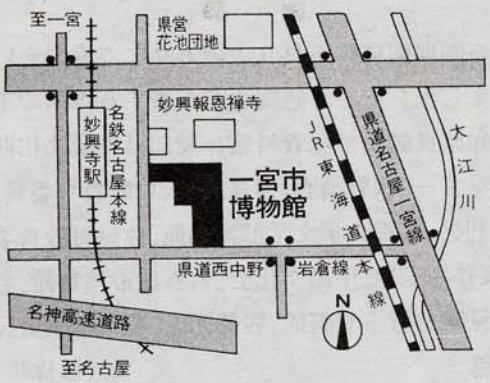
区分＼個人・団体	個人	20人以上の団体
一般	200円	160円
高・大	100円	80円
小・中	50円	40円

(1人1回)

休館日

- 毎週月曜日
  (ただし、休日にあたる場合は翌日を休館)
- 休日の翌日
  (ただし、日曜日又は休日の場合は開館)
- 年末・年始
  (12月28日→1月4日)

名鉄電車「妙興寺駅」下車徒歩5分



催し物のご案内

◎講　演　会

と　き：昭和63年3月13日(日)　午後1時30分から
ところ：講座室
テーマ：「赤ー紅(くれない)への憧憬ー」
講　師：奈良大学教授
　　水野　正好 氏

◎講　演　会

と　き：昭和63年3月20日(日)　午後1時30分から
ところ：講座室
テーマ：「古墳前夜」
講　師：愛知県埋蔵文化財センター
　　赤塚　次郎 氏

◎次回特別展（予定）

テーマ：浮世絵にみる繊維の手仕事ー蚕織錦絵ー
会　期：昭和63年4月28日(木)～5月22日(日)
ところ：特別展示室
内　容：江戸時代中ごろから明治にかけて描かれた「蚕織錦絵」(東京農工大学付属繊維博物館蔵)により、養蚕・製糸・機織の女性の手仕事を紹介するものです。同時に、その時代の状況や風俗・庶民の生活ぶりを示すことも意図しています。

◎特別展記念講演会（予定）

と　き：昭和63年5月8日(日)
ところ：講座室
テーマ：「絹の魅力と特性」
講　師：東京農工大学工学部付属繊維博物館長
　　北　村　愛　夫 氏

一宮市博物館だより　第2号

昭和63年3月4日

編集・発行　一宮市博物館

〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地

Tel 0586－46－3215